

## 小高に息づく武士道精神。 それは地域のシンボルとして開花する。

小高は、野馬追祭の原型ともいわれる「野馬懸」、そして野馬追祭にあって唯一の“静”の神事である「火の祭」が行われるまち。まちに息づく熱い武士道精神は、今も地域のシンボルとして脈々と受け継がれている。



野馬懸祭で、御小人は命がけて野馬に挑む

野馬懸祭で、御小人は命がけて野馬に挑む。古式に則った甲冑に身を固めた男たちが操る約六〇〇頭の馬が集結する。神輿を守りながらの武者行列「お練り出し」、陣羽織姿の若武者たちによる古式甲冑競馬「宵乗競馬」、そして上空に打ち上げられた神旗を数百の騎馬武者が



武芸鍛練と妙見信仰のシンボルであった野馬追

小高町は戦国絵巻を現代に伝える「相馬野馬追」の重要な舞台。国指定重要無形民俗文化財に指定されているこの祭のルーツは約千年もの時をさかのぼる。江戸時代に、こ



裸馬を小高神社へ追い込む

の地を領した相馬氏の祖、平将門が下総国（現在の千葉県）で催していた野馬を敵に見立てての武士の鍛錬が、やがて子孫の相馬氏によって現在のような祭礼のかたちに整えら

火の祭、  
そして  
野馬懸祭へ

奪い合う「神旗争奪戦」などが繰り広げられた末、三日間にわたる祭礼は、小高妙見神社の「野馬懸」で幕を閉じる。



幻想的な火の祭

「野馬懸」は騎馬武者が境内へと追い込んだ野馬を、白装束の御小人たちが捕らえ、これを妙見神に献納する神事。「相馬野馬追」のなかでも、もともと古来からの伝統を色濃く残すのがこの「野馬懸」とされている。

「火の祭り」。町民の手によって田園に三千数百の篝火が灯される。これは騎馬武者たちの行列を小高町に迎えるために焚かれた篝火の伝統をいまに受け継ぐものだ。そして、打ち上げ花火。天には花火、地には篝火。馬場を疾走する騎馬武者の「動」と、闇を照らす篝火の「静」が、小高町の夏を勇壮に、そして華麗に彩る。



出陣式(小高神社)



墓前祭(同慶寺)



町内騎馬行列